

美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」

—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(15)—

大本 達也¹

要旨

美妙・山田武太郎による詩歌集『少年姿』(1886)は、寺院文化にはじまり、戦国から江戸中期にかけて武士間にも広がった「男色」を主題とする。明治期における男子学生間での「男色」再流行のもとこの作品は成立するが、前近代的な「男色」は近代に成立した「恋愛」に次第に追いやられてゆく。この作品は、“poetry”概念に基づく日本語「詩」の形成史上、恋情を主題とした初の詩歌集であり、前近代と近代と結ぶ靱帯的作品である。

キーワード

稚児, 恋愛, 『賤のおだまき』, 『当世書生気質』, 『キタ・セクスアリス』

はじめに

古来、「文学」という言葉は漢学を中心とした学問という意味で用いられ、「詩」は「漢詩」を意味していた。連続論文「明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論」では、明治以降における国民国家(nation-state)形成により、「文学」が今日的な語義に変化していった過程を検証する。この各論4シリーズでは、“poetry”概念の影響を受けた日本語による「詩」の形成過程を追う(なお、本稿では“poetry”一般を示す言葉として「詩歌」を用いる)。

1885(明18)年、当時大学予備門(後の一校)在学中であった美妙・山田武太郎(1868-1910)、尾崎紅葉(1868-1903)、思案・石橋助三郎(1867-1927)と高等商業学校在学中の九華・丸岡久之助(1865-1927)は、初の“literature”概念を背景とした結社、「硯友社」を設立し、機関誌『我楽多文庫』の編集・刊行を始める。『我楽多文庫』は、同年から翌年にかけて肉筆回覧誌として第8集まで発行され、第9集以降は活版本となる。現在、この肉筆回覧誌は原本未公開で内容確認ができないが、本間久雄の筆写目録から第3集から第8集において『少年姿』の一部が発表されていることが確認できる[山田2016:406]。それらが編集され、1886(明19)年、詩歌集『新体詞華・少年姿』(以下、『少年姿』)が発刊される。各論4-5にあたる本稿では、『少年姿』の内容をたどったうえで、男色^{なんしよく}を主題としたこの詩歌

¹ 国際人間科学部国際学科

集の新体詩形成上における意義を考察する。

下に各論4の構成表を付す。

各論4構成表（最終閲覧日：2018年1月9日）

論文内 呼称	論文名	掲載号 (発行年)
各論 4-1	日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立—国民 国家論7(※)— https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1415&item_no=1&page_id=13&block_id=61	鈴鹿国際大学 紀要・第16号 (2010)
各論 4-2	『新体詩抄』による「詩」の本流形成—国民国家論12— https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1507&item_no=1&page_id=13&block_id=61	鈴鹿国際大学 紀要・第21号 (2015)
各論 4-3	『新体詩歌』による「詩」の流域拡大—国民国家論13— https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1888&item_no=1&page_id=13&block_id=61	鈴鹿大学紀要・ 第22号 (2016)
各論 4-4	『十二の石塚』による「長詩」の誕生—国民国家論14— https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2483&item_no=1&page_id=13&block_id=61	鈴鹿大学紀要・ 第23号 (2017)
各論 4-5	【本稿】美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」 —国民国家論15—	本紀要

※ 論文の副題「明治期における「文学」の形成に関する国民国家論」は「国民国家論」と略記

筆者の管理するHP「大本達也の研究室」(<http://www65.atwiki.jp/omototatsuya/>)からもこの連続論文の諸編がダウンロード可能である。正誤表も順次アップロードしているのでご参照いただければ幸いである。

なお、本論文中、敬称は省略し、引用は《 》、出典は[編著者名:ページ数]で示し、「国立国会図書館・デジタルコレクション」からの引用のみ[編著者名:コマ数]とする。また、読みやすさに配慮し、大本による注釈を()で示す他、原典に付されているルビはカタカナで、難読漢字へのルビはひらがなで示す。傍点は原典に付されたものである。

1. 『少年姿』を読む

では、『少年姿』の概要を見よう。作品は8章構成で、7篇の作品からなる。それぞれに「略伝」が付され、七五調、改行なし、反歌が付された長歌形式である（一行32～3字、以下、反歌を除いた行数を示す）。

1.1 平田三五郎宗次[山田 1886b:5-8]

「略伝」にこうある。《文武二道に志厚く、其性剛毅なる》、薩摩国島津家の執権職の嫡男・平田三五郎宗次は、同じ島津家の家臣で《頗英名を轟かしたる》吉田太蔵清家と《兄弟の義》を結び、《生死を共にせんと盟ひ》、《二人常に相離れ》ぬ仲となる。慶長4(1599)年、二人は《偕に軍に召され》、清家が《竟に叶はずや、果敢なくも、戦没》するを見るや、宗次も《賊中に突入り》《戦歿》し、《生死を共にと盟ひたる其言の葉を全く》する。宗次15歳、清家16歳の時である。

戦の場面のみを採る50行詩歌である。《賊も味方も入乱れ、おめず怯まず戦ひたる 処は大隅財部城》、《乱軍危急の其中に 恐れも得為でゝめる》のは、《三五(=15歳)ばかりの美少年、其名も平田の三五》である。《月恥かしき 顔に》《天晴優しき打扮》、《愛らしき武者態》で、《賊も味方も見惚らす》ほどである。ところが、《前に賊に囲まれ》、行方知れずの清家が遺骸で運ばれると、三五は《年来日来兄上よ、吾弟よと睦ましく、血筋も及ばず契りしも、思へば夢か、幻か》、《同年、同月日に死なんづ》と嘆き、《賊中に、面も振らず衝入りて、縦横無碍に馳せ回り》、《此处に戦死せんもの》と、《姿に似合はぬ奮勇絶倫》、《身に立つ矢をば抜きもせず》、《裏欠かれても才衰へず》戦い、やがて落馬する。そこに、《賊兵、髪よりかかつて打下す 幾十口の乱刀に、鎧はあへなく斫碎かれ、さと迸る血煙の》、《あはれ冥途に急行く、是や平田が身の終末》と三五は果てる。

肉筆版『我楽多文庫』第4集(1885)収録の「二幅対美少年姿 第1対右平田三五郎宗次」という文章が初出と見られ、その中で山田は種本を《「賤のをだまき」》としているが[山田 2016:406-7]、この作品については後述する。

1.2 白菊[山田 1886b:8-11]

「略伝」には、鎌倉、建長寺の僧・自休に《眷恋(恋こがれること)》された相承院の《行童》・白菊は、自休への《炎情》が《切なる》ものとなる一方で、《僧正の恩を忘れて、志を移すに忍びず》、ついに《淵に身を投げて、底の藻屑と消え》るとある。

47行詩歌に死の間際の白菊を描く。《萎果てたる白菊》は、《嘆の姿又更に、笑むにも優る 麗さ》であり、《名に因みてや乱菊を、染めし生絹の袷着て、雪より白き練絹の 奴袴穿きたる姿》も《優し》い。渚に至り、後から尋ね来る人(自休)に渡してほしいと、春菊は渡し守に扇を託す。《岩屋の門の門松も、操は更へぬ深緑、翠の髪末長き 命捨つるも誰がため》、《許させ給へ御僧正》、《斯くも覚悟を極めしは、仇なる事に候はじ》と、僧正へ

の謝罪を述べつつ、《折々途^{ミチ}にて遭ふ毎^{ゴト}に、わりなく袂^{タモトヒキトド}引止め、口説く言葉も最切^{イトセツ}なる》と、自休との出会いを振り返り、《君を一回見てしより、日々に炎情は乱菊の^{オモヒ}乱苦^{ミダレグルシ}さ増鏡》、《忍ばれぬ胸^{ウチ}の裡、可憐^{アハレ}とばかり^{ミソナハ} 嚮^{ミソナハ}し、唯一枝の露をだに、掛給ひね》と、《心の誠^{アラハ} 顕^{アラハ}して》くれる自休の《言葉の有難き》を想う。こうして、《恩^{メグミ}は高き御僧正。情^{ナサケ}は厚き御蔵主^{ザウス} (自休)》という両者の板挟みから白菊は、《霎時^{シバシ}眼を閉ち合掌し》、淵から《身を躍ら》し、ついに《姿は見えずなりゆ》く。

巻末付録の「白菊の^{カンガヘ}考」では、《鎌倉物語^{マキノ} 卷二》および《江島大草紙^{エノシマオホザウシマキノ} 卷二》の《児が淵^{チゴ}の条^{クダリ}》を粉本として引用紹介する[同:32-5]。なお、自休ではなく僧・清玄との心中物という相違はあるが、『桜姫^{あづま} 東文章』という芝居も稚児が淵におけるこの悲劇を扱う[鶴屋 1926:21-142]。

1.3 上田俊一郎友世[山田 1886b:11-3]

「略伝」には下記のようにある。上田俊一郎友世は、《安房国里見家の臣^{シン}》で、《幼きより奇才ありとて、大ひに人々に称へられ》たが、14歳のときに、《同家中の士》五十嵐左近友と《兄弟の義》を結ぶ。その《交^{マヅハリ} 深き》ことが《腹黒き者》の《嫉妬^{ネタミ}》を呼び、《人知れず左近を殺さまく図りし》ことを友世は知る。けれども左近は《君命にて、上総^{カヅサ}に行きし後》であった。友世は一人上総に向かうが、途中で待ち伏せされ殺される。

31行詩歌に友世暗殺の場面を描く。《一徹の 心も堅き美少年》友世は左近の元へ急ぐ。《眉はさながら半輪の 月を懸けたる如くなる、眼の光うるほいて、是や雨中の芙蓉花》、《鬢^{ビン}の短毛横顔に、垂れて一入^{オクレダ}愛らしき》友世は、《続^{ツツケザマ} 様にて走りしかば、咽喉^{ノド}渴きて堪難^{タヘガタ}し》とひとりごちつつ川際に寄る。すると、《隙^{ウカガ}を窺^{クサモノ}う漢者》3人が襲いかかる。友世は《そ^{ナンタチ}も汝等は何者ぞ》と叫ぶが、その《背^{ソビラ}にぱつさと、浴菟^{アビセカ}けたる不運の一刀》が入り、《機^{ヘズミ}に身体はけしとんで》川に落ち果てる。《友世の最後ぞ哀なる。知る人無きぞ哀なる》。

『我楽多文庫』第3集(1885)収録の「二幅対美少年姿 第1幅左上田俊一郎友世」が初出と考えられる[山田 2016:406]。

1.4 梅若丸[山田 1886b:14-8]

「略伝」には、《吉田少将^{コレサダ}維貞の子》梅若丸は、《信夫^{シノブ}の藤太^{トウダ}》に《掠^{カドワカ}引されて》、武蔵の国、隅田川まで連れて来られ《河原にて殺され》るとある。

104行詩歌に梅若丸の末期を謡う。《ここは隅田の堤とよ》、《浮寝に夢や水鳥も、都といへば懐かしや。羨ましくも^{タノシグ} 楽^{オヤコナミイ}気に、母子並居て泳ぐかも》、《我は憂目の夢にしも、母君をのみ見進らす》と、親子の水鳥を見て梅若丸は京の母を想う。秋田に売り飛ばされては、二度と母には会えないと《手を合はせ、涙ながらに口説^{クド}》くが、人買いの藤太は《棒振り上げて^{チヤウチャウ} 丁々^{トコロ}と、処嫌^{ツツケウチ}はぬ連打》をする。通りかかった阿闍梨・忠院に諭されるも藤太は、《黙れ悪僧肝太し。這奴^{コヤツ}の容顔^{カホバセ}猗^{ウルハシキ} 艶^{チゴ}を、見たれば行童^{チゴ}に為まほし》、《猶龍陽^セ (=男色) を愛づるな^{なお}》

大本 達也, 美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」

る其煩惱のある身にて、藤太^{サイド} (=救済) は覚束無^{オボツカナ}と《冷笑^{アザワラ}》う。《快くも五体は萎^{ハヤ}疲^{ナエ}れ、起つ事さへも中垣に、冬を凌ける蟋蟀^{シノ}、鳴く音も出ぬ光景^{キリギリス}》の梅若丸に、藤太は《偕^{サテ}も脆^{モロ}さよ。快死^{ハヤ}ぬか。縦哉^{ヨシ}死なずともかくまでに、弱^{ヨワリ}果てては、売りしとて、鏹^{ビク}一文にさへならず》と言い捨て、《肩腰脊^{カタコシセナ}の嫌^{キラヒ}無く、足に任して蹂躪^{フミニヂ}》り立ち去る。《往来の人々^{コレ}》が《是^ラ等の様に何事》と集まる中、梅若丸は忠院にその素性を明かし、《丸^{マロ} (=私) が身の骸^{カラ}をばやがて (=そのまま) 此の河原に、埋^{ウツメ} 給^{ヒトモト}ひて一本の、柳を植^{オクツキ}ゑて墳墓^{シルシ}の誌^シと為させ給へかし》と言い残し息絶える。

この逸話は能『隅田川』として知られる。こちらでは、子を探す母の前に梅若丸は亡霊として現れる。藤太や阿闍梨・忠院は登場しない[観世 1997]。

1.5 鳥屋福寿丸 [山田 1886b:18-25]

「略伝」はこうある。大和国越智の郷に越智玄蕃頭利之^{ヤマトノクニ}、同国箸尾の城主に箸尾宮内少輔^{ダシバノカミ} 為春という者がいて、《常に相敵視^{アイ}して、戦ふ事^{シバシバ} 屢》であった。ある戦いの時、越智の家人、鳥屋九朗左衛門の嫡子・福寿丸と、米野次郎右衛門の二男・宮千代の二人が出陣するが、両名とも捕虜となり箸尾一族の葛西右衛門勝永の預かりとなる。福寿丸は隙を見て一人逃げ出すが、箸尾は憐れんで宮千代も送り返す。結果、《友を捨て、独^{ヒトリノガレ} 逃帰^スりし》と誹られることになった福寿丸は勝永を逆恨みし、《汚名を雪ぐ日を待^ス》つ。ある合戦で勝永と一騎打ちとなり、福寿丸は討たれる。勝永はその《亡骸に、手紙と歌とを差添えて、父の鳥屋に贈^{ナゲキ}》る。勝永に礼状を贈った鳥屋は、《子を先立てし嘆^{ナゲキ}に堪へ》られなかったのか、ほどなく《福寿丸と 同場所^{オナジ}にて潔く、戦死^{ウチジニ}を遂げ》る。これを知った勝永は出家し、《二人の菩提》を弔う。

書籍中最も長いこの 109 行詩歌は、出家し高野山にいる勝永が《行童^{チゴ}》を相手に僧仲間の前で世語りするという体裁をとる。語られるのは「略伝」に沿った内容であるため、ここでは最後の福寿丸との戦いの場面を引く。

《一日敵の陣よりして、馳せ出す一騎の士》がある。《某^{ソレガシ} (=時永) かくと見るよりも、すは好き敵にこそあんなれ》と、《物をも言はず斫^{キリ}付》ける。《挑^{イジミ} 争ひたりしかど、果てしあらねば那敵も、某^{ソレガシ} もろとも太刀投捨て、馬をあはせて引組^{ヒツクン}だ》かと思うと、二人とも《鎧^{アブミ}を踏^{フミ}外し、両馬の間に》どうと落ち、《上を下へと揉^{モミ}合》う。《終に組敷きて》、《首をふつと搔落^{カキ}と》し、その《冑^{カブト}を脱がせ篤^{ヨク}視れば》、《十五六なる少年にて、眉のかかりの麗しき、鬢^{ビン}の匂^{ニホイ}の華やぎし、白き襟筋血に染みて》、《是ぞ洵に紛^{マコト} 無^{マダヒ}き 福寿丸》と初めて敵が福寿丸であったことに気づく。その《驚愕^{オドロキヒトカタ}一方なら》ぬものであった。

やがて、勝永の語りが終わる。一同は《側^{カタヘ}の行童^{チゴ}が美^{オモテ} 面^{ソゾロ}を坐に見詰めつつ》、《かの福寿丸が面影も、斯くやりけん最^{イトラシ}惜》と、《行童》に福寿丸の姿を重ねる。

1.6 森蘭丸長貞 [山田 1886b:25-6]

蘭丸は言わずと知れた織田信長の小姓、「略伝」では《聡明叡智の美童》と紹介される。

この最短の 27 行詩歌の描くのは死を直前にした蘭丸の姿である。《何やら物騒がし》
《見届来よ》という信長の命により攻め来る軍勢に気づいた蘭丸は、《逆臣惟任日向守 (=光
秀)、御前近く寄せたるぞ。防げ防げ》と叫ぶ。《天成の美少年》蘭丸は、《羽を伸す鶴の定
紋を、白く抜きたる衣模様》という出で立ちであり、《おなじく鳥中の 鶴とも見ゆる容貌》
で、《尊氣にして婀娜 (=女の色気)》めくこともない。今、蘭丸は《無量の情を含むなる双の
眼と唇に、殺気をさへに帯し様、凄きばかりに麗しき》表情である。

1.7 大川数馬 [山田 1886b:27-32]

「略伝」には次のようにある。5 歳の時、会津藩家臣の父を殺された印南亀之助 (大川数
馬) は、12 歳で母とも死別する。母は《臨終の際までも、復讐の事をくれくれ言遺》す。孤
児となった亀之助は浅草寺に養われ、13 歳の時《容貌美麗なるのみか、挙動も拙からぬ》
と、参詣した肥後城主・細川越中守の目にとまり、その小姓となり数馬と名乗る。越中守
の《寵愛は一方ならぬ》ものであったが、《復讐の大望は、片時だにも露忘れ》ない。15 歳、
浅草寺に参詣した数馬は、武蔵川越藩士・大川友右衛門に《眷恋せられ》る。友右衛門は
《数馬の美貌》を見て、《如何なる意馬の狂 (=煩惱による心の乱れ)》か、《人知れず胸を焦
し、艶書をさへにおく (送)》る。数馬が無視すると、友右衛門は《禄を辞し、細川家の中間
(中間奉公、足輕と下男との間の身分) となり、再 数馬を跟狙ひて、艶書を贈》る。《数馬
も終に辞難ね》、《兄弟の義》を結び、《我復讐の扶援》としようとする。友右衛門は復讐に
先立ち《君のために》命を落とすものの、20 歳の時、数馬は《ようやくに》《本懐を遂げ》
る。

この作品のみ「上」「下」に分かれるが両者で一作品、合わせて 78 行の詩歌である。ま
ず「上」から見る。《待つには長き冬の日》、二人は初めて逢引きをする。友右衛門が《垣の
折戸をそと (そっと) 推せば》、《音を早くも聞附けし 数馬も待詫びたりにけん》、障子を引
き明けて、縁側に出てきて《物をも言はず莞爾に、笑を含みつ、会釈して 手を取り、居間
に引き入》れる。友右衛門は、その《手触りの柔き、絹の温気も及ば》ぬと感じ、《導かる
身は宛然に、夢路をたどる如く》であると思う。数馬は、《取るにも足らぬ 某に、優き言
を賜はりし 御志のあり難き》、くつろいで世語りましようと言いつつ、友右衛門が自分
を慕う一心で《禄を捨てたる》ことを《文にて》知りながら、《さりとは口に岩躑躅》、わざ
と触れない。《愁ふる如く、笑む如き 面色をして燈火に、背けば頬の笑靨さへ、また顕然
と現れて、猶愛らしき》と、数馬の美しさに見入る友右衛門は、《心も空になる神の 轟く
胸を推鎮め》ながら、《心の裡の切なさは、思細りし命毛の 筆に言はせて快已に、進らせ
たれば、改めて、語出づるに及ばねど》と、すでに文に書いた数馬への慕情は口にせず、
《叶難かる願を、叶給へし御情、いつか忘れん、忘るべき》と対面が実現したことをただ
感謝するのみである。《礼を申すに言葉とて、有らぬを察したまひてよ》と、友右衛門が《岩

切通^{キリトホ}し行く水の 心を酌^スみて賜ひね》と言ったきり押し黙ると、数馬も《俄^{ニワカ}に座を正し、桔^{キツ}と容^{カタチ}を改め》る。

続いて「下」である。数馬は《不俱^{フグタイテン}戴天^{アザ}の父の仇、報^{スベ}ひん術も有らんか、と 思^{オモヒキ}附きたる心》より《忍^{シノビネ}音》で、《取るも足らぬ 某^{ソレガシ}を、さまで愛でさせたまふ事、現^ゲに啻^{タダ}ならぬ縁^{エニシ}ぞ、と思ふばかりに嬉さは、限もあらず候へど》、《和殿^{ワノコ}(=あなた)が日ごろ 某^{ソレガシ}を、愛でたまひぬる夫よりも、猶^{ナホ}一入^{ヒトシホ}に 某^{ソレガシ}は、和殿^{ワノコ}を慕^{シタヒマツ}奉るなれ》と友右衛門の恋情に応える。けれども、《 某^{ソレガシ}も、また武士の胤^{モノノフ}になん。齢こそ行かね、男子^{ヲノコ}なり。君に受けぬる高恩を、等閑^{ナホザリ}にして身を軽しめ、不義の契をびなば、男子たるべき甲斐も無し。武士たるの甲斐も無し。人の道にも背くめり。天の道にも違^{タガ}ふめり。義政以来盛^{サカリ}なる 色子の群に入らんなり》、《遊女^{アソビメ}にしも似るなり》と言い、《忘年^{マシハリ}の 交^{タメシ}をして義を結び、後の世までも香はしき 名を残したる 例^{タメシ}あり》と平田三五郎の例を挙げる。そして、彼が《義少年ぞと言はるるは、義勇^{オヨナヒ}の 行^{タメシ}あればなり。士道を尽くしたればなり》としたうえで、《和殿誠^{ソレガシ}に 某^{メデ}を、愛給ひなば》、《弟とも、子とも、甥とも 懽^{ミソナハ}し 此後ともに末長う、愛^{メデイツクシミ} 慈^{メデ} 給へかし》と友右衛門の恋情を受け入れる。

大川友右衛門は、明治から大正にかけては《なかなか有名な人》であり[氏家 1995:128]、山田には「大川友右衛門」と題する詩歌もある[山田 1886a:23-7]。この作品および収録された山田編集『新体詞選』(1886)については、各論 4 シリーズの別稿で触れる。

2. 『少年姿』と「男色」

『少年姿』は、長詩『十二の石塚』(1885、各論 4-4 参照)に次ぐ第 2 の個人詩歌集であると同時に、伝統的な長歌の流れをくむ第 2 の長詩(集)でもある。が、新体詩としての新味は文体的にも語彙的にも少ない。にもかかわらず、本稿でこの作品を単独で取り上げるのは、その各編が「衆道^{しゅどう}」あるいは「男色^{なんしよく}」という男性間における同性愛を主題としていることによる。これまで各論 4 シリーズで見てきたように、この作品登場以前、新体詩では男色はもちろん恋愛を主題とすることは周到に避けられてきた。そういう状況下、山田はどういった社会的背景や意図をもって男色という主題を選んだのだろうか。

2.1 『少年姿』と明治以前の「男色」

まず、認識しておかなければならないのは、この詩歌集の時代背景となっている戦国から江戸期において男色は《「性倒錯」や「変態」》的な行為ではなく《単なる「好色」の一形態》と見なされていたということである[佐伯 2015:70]。武士の支配する世において男色は《逸脱した性関係として異常視されるどころか、逆に武士道の華とさえ賛美された》のである[氏家 1995:30]。

男色は僧侶社会に始まる。寺院文化の育んだ男色は、院政期頃に貴族社会へ、鎌倉末期頃に武家社会へ流入し浸透してゆく[佐伯 2015:9]。寺院における稚児の悲劇を描いたのが

「白菊」である。「梅若丸」でも、「稚児」^{ちご}、すなわち男色の相手となる少年として梅若丸が売り渡されなるとする場面が描かれ、稚児を愛でる男色家の阿闍梨・忠院も登場する。当時、「僧が美貌の少年を買い、稚児とすることもあった」ことから[同:16]、忠院あるいは仲間の僧侶が人買い藤太と取り引きしていた可能性をも匂わせる。

寺院における稚児愛玩の背景としては、「仏教的文脈」において《容貌の美》が《前世の功德の証左》とみなされたことがある[同:23]。そこには《現世的恋の願望》というよりもその《美の背後にある聖性や功德を獲得せんとする》意図が存在する[同:12]。一方で、女性が「罪深き」存在として《男性の劣位》に置かれたため、稚児がその代替品となった側面も否定できないと佐伯順子は指摘する[同:23]。すなわち、「日本の中世仏教で台頭した《女性=悪人》という差別的な女性観」は、「高野山、比叡山といった仏教の聖域における女人禁制という、現実上の宗教実践としても発現し」[同:73]、その対極として《出産しない性どうしの男色関係》が《血の「穢れ」から逃れ、現世を超えた悟りの境地へと〈男性が〉ゆきつく有効な手段とみなされる》こととなっていったと言うのである[同:74]。《ジェンダーとしての〈女性性〉を身に帯びた」稚児が《誘拐事件の被害者、性の商品化の対象という社会的、性的弱者性を有していた》とする佐伯の指摘は[同:17]、「梅若丸」にそのまま反映されていると言えよう。

「鳥屋福寿丸」では、僧侶、武士、両者における男色が描かれる。武士間の男色においては、兄貴分が「念者(念人)」^{ねんしや}、弟分の少年が「若衆(稚児)」^{わかしゅ}と呼ばれる。主人公の福寿丸が若衆であったことは明示されない。けれども、福寿丸の死を機縁に出家した勝永が、その思い出を稚児相手に語り、稚児と福寿丸を重ね合わせていることから、福寿丸が身請け人・勝永の若衆とされていたと解釈するほうが自然だろう。つまりこの詩歌は、念者・勝永が今は亡き若衆・福寿丸の思い出を語るものなのである。

1873(明6)年に明治政府に提出された建白書には、男色の主要パターンとして、僧侶と稚児、大名と寵童、武士間の義兄弟関係の3つのパターンが挙げられている[氏家 1995:133]。

「梅若丸」は第1のパターンであるのに対し、「森蘭丸長貞」は第2のパターン、大名・寵童間の男色を背景とする。戦国期において《主君や傍輩との肉体関係が推測される若武者》は《いちいち名前を挙げきれないほど多かった》と氏家幹人は指摘し[氏家 1995:91]、武田信玄が春日源助(武田四天王の一人・春日虎綱)に宛てた一種の恋文などを紹介している[同:95]。

「平田三五郎宗次」と「大川数馬」は第3のパターンである武士間の男色を素材とする。《「兄弟の約」、「兄弟の契り」、あるいは「兄弟契約」等の表現》で呼ばれた、いわゆる《義兄弟の関係は《当時の男性間同性愛を特徴づける大きな要素の一つだった》と氏家は解説する[同:127]。実際、《性愛を伴う義兄弟の関係》は、《戦国時代から江戸初期の武士社会において》は、《ほとんど習俗といえるほど日常的に観察され》るほど、一般的な関係であったのである[同:144]。

『少年姿』には合戦の場面や死の情景が多く描かれるが、それを佐伯は《近世の武士の男色物語》の特徴であるとする[佐伯 2015:112]。氏家も《武士の世界の男色》は、《日常的な戦いの気分と切り離しては考えられないもの》であると同様の指摘をしている[氏家 1998:141]、すなわち、《刀を駆使した果し合いが物語の見せ場として描かれ》ることは、《〈戦士性〉と流血の融合》の提示であるとともに《男色関係にある念者と若衆の〈男の絆〉の確認手段》でもあるのである[佐伯 2015:112]。

以上、作品とともにその背景となった戦国から江戸期における男色について考察してきたが、ここから『少年姿』が男色を主題に、その3大典型パターンを悲劇的に描き出すことを志向した詩歌集であることが確認できよう。

2.2 明治期における「男色」

では、『少年姿』が発表された明治中期において、男色はどう見られ、読者はどのようにこの作品を読んだのであろうか。

前川直哉は《江戸時代の男色文化は、幕末にはすでに絶滅の危機に瀕してい》たとする[前川 2011:26]。それでも、明治以降にも男色が存続していたことは、1873(明6)年に「鶏姦(男色)規定」(1881年廃止)が制定され、男色が禁止されていることから明らかである。

『少年姿』の主要な読者は男子学生・書生であったと考えられるが、実は《明治の少年たちにとって、美少年に対する憧憬や少年どうしの恋》は《“異常な体験、でも他言をはばかる秘め事でもなかった》のである[氏家 1995:58]。では、その実際を、2つの明治小説から探ってみよう。

まず、逍遙・坪内雄蔵(1859-1935)の『当世書生気質』(1885-1886)である[坪内 1886:7]。ここに登場する書生・桐山勉六は、男色について《実際に行ふたら。アンチ、ナチュラル〈天に背^{ソムク}〉でもあるじやらうし。イモモウラル〈不道德〉でもあるじやらうが。唯々理論上に行ふのじやから。毫も破廉恥の理由なしじや》としつつも、《最も人をして文弱にならしむるもんは。彼の女色といふ奴じやワイ》として男色を擁護する。その理由として《互に智力を交換すること》が出来ることと《将来の予想を語りあふて。アムビション〈大志〉を養成するといふ利益》があることを挙げて《女色に溺るる》より《龍〇(龍陽=男色)に溺るる》ほうがまだましだと豪語するのである。

この桐山の言説は《「智力の交換」や「大志の養成」》が男女間では不可能であることを前提にしていると前川は指摘する[前川 2007:8]。前川の言うように、当時、男色が《男女間の関係よりも高く評価》されたのは、それが《互いの成長や大志の養成を期待できる関係》として認識されたからであり[同]、そのような認識は《男子学生たちのエリート意識》と合致し、《「文武の奨励」や「国家への尽力」》と結びつけられたのである[同]。

このように男色は、《お互い文武を励ましあい、双方の成長や国家への貢献が期待できる関係》として当時の《男子学生たちの心》を強くとらえたのだが[前川 2011:42]、こういっ

た《学生男色》は《一部の学生の間》で《共有され、理想化されていた》《一種のファンタジー》であると前川は喝破する[同:47-8]。確かに、男色による自己成長や国家貢献という論理の破綻は言わずもがなだ。むしろ《ファンタジー》であるからこそ学生は男色に魅惑されたのであり、この《ファンタジー》が明治政府による富国強兵政策のもとで生じた現象であることに注目したい。それは、この政策が、新体詩において男女間恋愛という主題が抑え込まれた原因のひとつであり、その反動として男色という主題が提示されたと考えられるからである。

ところで、この『当世書生気質』では、《三五部の物語》が《ブツク〈洋書〉とともに本箱のうちに交》じり、《屢々取出して読むと思しく。其摺れたること洋書に優れり》というような桐山の部屋の様子も描かれる[坪内 1886:3]。ここに出てくる《三五部の物語》とは、『少年姿』における「平田三五郎宗次」の素材『賤のおだまき』である。『少年姿』と同時期に出版された『当世書生気質』においてもこの作品が登場することは、男色学生間におけるこの作品の人気ぶりを示している。

次に、鷗外・森林太郎(1862-1922)の『キタ・セクスアリス』(1909)を見てみたい。小説という形式ではあるが、ここには自己体験に基づくと推測される男色体験が描かれている[森 1972:110-7]。

主人公は11、2歳のとき、東京のドイツ語を教える私立学校の寄宿舎で《始て男色とふことを聞く》。ある年長の学生が、いつもお菓子などをくれてかわいがってくれるのだが、そのうち《手を握る》、《頬摩^{ホオズリ}する》いうふうになり、ついに《一しよに寝給へ》と言い出され逃げ帰る。帰って父親に話すと、《そんな奴がをる。これからは気を附けんと行かん》と、《少しもびっくり》しないで《平気》でいる。13歳になり、英語学校に入った主人公はやはり《硬派の犠牲》となるが、同室の学生のおかげで実際の被害はまぬかれている。彼は外出するとき《おれがをらんと、又穴^{ケツ}を覗^{うかが}ふ馬鹿もの共が来るから、用心してをれ》と言い残すので、主人公も用心のため逃げ口を確保し、さらに《短刀を一本そつと持って来て、懐^{ふところ}に隠してゐる》。

主人公の父親の態度から見ても、当時こういった性的行為を伴う男色が珍しいものではなかったことがわかる。主人公は《性欲的に観察して見ると、その頃の生徒仲間には軟派と硬派とがあつた》とし、軟派が春画を見たり遊里通いをしたりするのに対し、九州人が中心の硬派は男色を好み、数の上では軟派が優勢ではあるが《硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護^{ウシロメタ}い処があるやうに見えてゐた》と回想している[森 1972:113-4]。

氏家は、九州、中でも薩摩は《江戸時代以来、衆道〈少年愛〉のメッカ》で、明治維新以降その風潮が伝わると、《それまで女色に圧倒されてすっかり勢いが衰えていた男色が東京でも息を吹き返し》たと指摘している[氏家 1998:129]。さらに、1894(明 27)年以降、日清・日露戦争による《好戦的気分が広まるに伴って》、男色は《一大流行の観を呈し》、明治後期にはますます盛んとなり、《東京のほとんどの中学校》で、《男色党の連中が美少年を奪い

合う蛮風》、《“少年騒ぎ”が流行していた》という[同:129-131]。実際、明治2、30年代における男色の流行は《すさまじ》いもので、当局も《ややもすれば重大な犯罪にも至りかねないその加熱》に《相当頭を抱えていた》らしい[同:132]。さらに男色は、明治後半には《中央と地方を問わず全国的に流行し》[同:134]、この風潮が収まるのは大正期に入ってからなのである[氏家 1995:79]。このように、男色は明治期を通じ看過すべからざる学生風俗であり続けたとすることができる。

ところで、『キタ・セクスアリス』にも、硬派の学生が春本など見向きもせず、《平田三五郎といふ少年の事を書いた写本》を《引張り合つて読む》様子が描かれている[森 1972:114]。またしても『賤のおだまき』だ。作者不明の写本『賤のおだまき』は、1884(明17)年、小新聞『自由燈』に連載され好評を博した[前田 1989:322]。山田と同年代の魯庵・内田貢^{みつぎ}(1868-1929)も『社会百面相』(1902)で、ある書生に《俺は、男色宗だ。男色は陣中の徒然を慰める戦国の遺風で、士風を^{フルヒオコ}振起し国家の元気を養ふ道だ。少くとも女色に^{ふけ}耽るものの柔弱^{ニウニヤク}を救ふに足る。賤の小田巻を読んで見い。今の柔弱な恋愛小説と違つて^{ユウシンボツボツ}雄心勃勃として禁ずる^{あた}能はずだ》と言わせている[内田 1902:12]。

ここでも男色が《風を^{フルヒオコ}振起し国家の元気を養ふ道》であるという例の《ファンタジー》が語られているが、この『賤のおだまき』はまさに当時の《硬派書生の性典》だったのである[氏家 1995:75]、これに取材した「平田三五郎宗次」を『少年姿』の冒頭に置いたことは、山田が読者層として男子学生・書生を念頭に置いていたことの証左でもある。

山田と同年代では南方熊楠(1867-1941)が《男色関係の資料を多く蒐集し、男色研究者としての側面をもつとともに、実践者でもあった》ことはよく知られており[佐伯 2015:163]、色白で美少年だった蘆花・徳富健次郎(1868-1927)も、10歳代前半に複数の人物から性的愛撫を受け、「鶏姦」されていたことを告白している[氏家 1995:65、氏家 1998:135]。ただ、明治期の学生男色は、《「年上の男性(能動)→年下の少年(受動)」という形式にかぎられていた》のであり[前川 2011:150]、かつての武士や僧侶における男色と共通する構図が見られる。

以上、2つの作品を中心に明治における学生男色の実態を追ってきたが、男子学生をターゲットとして男色を主題に選んだ山田の戦略は、当時においては十分うなずける選択であったのである。

3. 『少年姿』は「恋愛詩」か

各論4シリーズでは、『小学唱歌集・初編』(1881、各論4-1)、『新体詩抄』(1882、各論4-2)、『新体詩歌』(1882-3、各論4-3)、『十二の石塚』(1885、各論4-4)と、日本語による“poetry”構築への模索を考察しつつ、そこに恋愛を主題とした詩歌が一切現れないことを確認した。

恋愛を詠む「情詩」を邪道とする漢詩(=詩)の影響により、恋愛を取り上げることは意図

的に避けられたことがひとつの理由である(各論 4-3)。明治以前において、恋愛は漢詩よりも下位に置かれた和歌(=歌)が担うものであったのだ。さらに、先に指摘したように、明治政府による富国強兵政策も大いに影響していた。詩歌の主題として優先されるのが、忠君愛国や戦争であったことは、これまで各論 4 シリーズで見えてきたとおりである。

一方、『少年姿』は本邦初の恋情を主題とした詩歌(集)である。では、そこに収められた諸作品を初の「恋愛」を主題とした詩歌、すなわち「恋愛詩」と呼ぶことは可能なのか、以下、考察してみたい。

3.1 山田武太郎と明治中期の詩歌観

『少年姿』は「新体詩」ではなく「新体詞華」と銘打たれているが、それはなぜなのだろうか。その背景には明治中期における呼称の混乱がある。当時における詩歌概念を整理しておく意味からも「唱歌づくり方初学」(1889)と「日本韻文論」(1890)における山田の主張を見てみよう。

まず当時、「新体詩」という用語が不安定なものであったことを確認しておく。《今日唱歌といふ言葉》が一般的だが、かつては《新体詩といふ名が流行し》ていたと山田は証言している[山田 2014:59]。『小学唱歌集・初編』に始まる「唱歌」は「新体詩」と融合し、両者はしばしば区別なく用いられる。山田の発言からは明治中期のこの時期、「新体詩」より「唱歌」という呼称のほうが優勢であったことが示唆される。

山田は『新体詩抄』を指して、「新体詩」というのは《大学の博士たちから言い初められた名称で、随分面白いにつけ方》であったとこの呼称を批判する[同:59]。「新体詩」という用語が《面白い》理由を山田は《「詩」といふ言葉》が《大きな邪魔》になるからだと言く[同:59]。山田は《大学の博士たちは「古」の長歌やうのものを俗語まじりで構はずつらねてそれに新体詩の名を命じ》たが、《その詩といふ事、それがそもそも邪魔もの》だと言うのである[同:88]。「詩」という言葉が《邪魔》というのはどういう意味だろうか。

山田は《Poetry》を《詩》と和訳するのは《甚だ不都合》で、それは日本で普通《詩》と言えば《ポエトリー》を意味せず《支那の詩》を意味するからだと言う[山田 2014:88]。山田は《詩と聞く》と《思ひ出すのは平仄、四声、および韻脚など》であり、《日本で用ゐ慣れた詩といふ語》はいまだに《各種の詩歌を包括しての意味》には受け取れない、《詩といふ語の不便はここにあ》るとする[同:88]。このように、山田は「新体詩」という用語の「詩」が漢詩を連想させることを問題視しているのである。

この各論 4 シリーズで繰り返し強調してきたように、明治以前においては「詩」は漢詩を意味し、和歌など日本語で書かれたものは「歌」であり、決して「詩」とは呼ばれなかったのだ。では、“poetry”をどう訳せばいいと山田は言うのだろうか。

山田は、《詩歌》とすることもできるが、それは《甚だ拙》であり、それでは《漢詩と和

歌とを意味する》だけで《ポエトリー全体の義は出ず》、《川柳都々逸の類の意》はこめられないし、単に《歌》とするとその《意味は和歌、長歌、短歌の類に限られて》他のものを含まなくなるとしている[同]。そこで、山田は《韻文とは即ちポエトリーのこと》で《文に対する詩全体の事》だとして、《韻文》という訳語を提案する[同:87]。《日本のポエトリーの中には和歌もあり、長歌もあり、連歌もあり、俳句もあるが、《日本でいふ詩》は《支那の詩よりしか意味し》ないのに対し[同:88]、《韻文》は《広い名》で、《長歌も、催馬楽も、謡曲も、浄瑠璃も 悉く各韻文の一で》あり、その中には《和歌や他の成分が有る》と主張するのである[同:89-90]。ただ、《ポエトリーと命ずる迄の間に於て韻文の外に好い名が猶有ることならば吾々も喜んでそれに従ふつもり》だと[同]、この訳語があくまで便宜的なものであることを断っている。

また、「日本韻文について学者が工夫すべき箇条」(1890)で山田はこう述べる。《日本の韻文は古から色々な種類》があり、《和歌の上から都々逸大津絵の下まで皆一様に概言すれば韻文》であるが、《学者が工夫されるべき事》のひとつに《日本韻文の称呼を定める事》があり、《詩、歌などの名義は既に有るが《意味が各々辺り廻して》いるため《これを一層充分な名義にすること》が必要である、と[同:70]。

「日本韻文論」における《日本韻文といふ韻文、その内訳を数へれば和歌といひ、謡曲といひ、俳諧といひ、浄瑠璃と云ひ、其他残らずで殆んど30種にも上る、其外観は盛んな物》であるのに、これらを含め訳語は不適切であるという山田の指摘は[同:98]、今日でも意味を持つ。すなわち今日、“poetry”に対する訳語として「詩」や「詩歌」が定着しているが、「詩歌」は一般的に謡曲や平曲、浄瑠璃などは含まないし、「詩」は和歌や俳諧を排除しがちで、実際、和歌や俳句を「詩」と呼ぶことに違和感を感じる人は多いだろう。明治以降、「詩」や「詩歌」が新たな概念に置き換えられていく過程で、日本における“poetry”概念は極めて限定的なものになっていったのである。

以上のように明治以前の韻文を包括しようとする意図から、山田は『少年姿』を「新体詞華」と銘打ったわけであるが、「詩歌」に通じる「詞華」という言葉選びに、「詩」=漢詩への連想を避けようとする山田の配慮が見える。『新体詩抄』に続く『新体詩歌』でも、「詩」は「詩歌」に置換されているが、『少年姿』と『新体詩歌』に共通するのは長歌という「歌」との結びつきの強さである。つまり、『新体詩抄』が「歌」を否定し「詩」=漢詩に代わる日本語による「詩」=“poetry”の確立を目指したのに対し、『新体詩歌』や『少年姿』は「歌」、すなわち和歌的伝統を否定しないところに位置しているのである。

3.2 「色」から「恋愛」へ

それでは、男色を描いた『少年姿』の諸編を「恋愛詩(love poem)」と呼び得るのかを考えよう。結論を出す前に、まず「恋愛」という言葉が明治期に生まれた新しい言葉であることを確認しておかなければならない。柳父章は、“amour”の訳語としての「恋愛」が初確認

できるのは、1887(明 20)年版『仏和辞林』(仏学塾発行)においてだとしているが[柳父 1982:95]、文章中に普通に使われるようになるのは当然これ以降となる。つまり『少年姿』が発表された 1885-6(明 18-9)年には、いまだ「恋愛」という言葉は存在しなかったわけだ。では、「恋愛」登場以前、それに代わる言葉はあったのだろうか。

人が人に惹かれることは自然な人間の欲求であり、そういった感情は明治以前の日本語では「色」や「恋」という言葉で表わされていた。それでも、菅野聡美の言うように《それまで使われてきた「色」や「恋」では love や amour を適切に表現できないからこそ、「恋愛」という言葉が考案された》わけである[菅野 2001:10]。では、「色」や「恋」は「恋愛」と何が異なっているのか。

まず、「男色」にも用いられている「色」という言葉だが、これは「色事」、「色を好む」、「色に溺れる」、「色に迷う」などの言い回しがあるように、性欲を伴う「色情」的感情を表す言葉で、《男色》も《女色》もいずれも《同じ「色」の範疇にあ》った[佐伯 2015:82]。そこに、芸妓などにおける「色道」のように《無秩序な性の欲望を噴出させる》だけではなく《書道、華道、茶道など様々な「道」を動員し、歌舞音曲もあわせて、人生のひとときを美的な、非日常的な時空間にするための手段》という意味合いが重ねられたと佐伯は指摘する[佐伯 1992:146]。このように、遊女や若衆が担った「色」の世界観は“love”や“amour”の概念からは大きく隔たる。

一方、「恋」という言葉は、男女間の交情に古くから用いられてきた言葉で、男性間のそれも、たとえば能『花月』の小唄「《来し方より今の世までも絶えせぬものハ恋と云へる^{くせもの}曲者。げに恋ハ曲者。くせものかな/身はさらさらさら。さらさらさらに。恋こそ寝られね》」などに表されている[観世 2007:3-4]。ここで「恋」を謡うシテ・花月は、衆道の担い手たる美男子である。この「恋」は「色」に比べれば“love”や“amour”に近い語義を持つが、どちらかという肉欲的な意味合いが強い言葉である。そこで「愛」という語が加えられ、「恋愛」という漢語が作り出されたのである。

ただ、この「愛」という語は、元来、男女の愛情に用いられる言葉ではない([『新鮮古語辞典・新版』小学館)。たとえば仏教用語としては、「ものを貪り執着すること」(『仏教学辞典』法蔵館)、「好ましい対象に対する飽くなき渴望」(『岩波仏教辞典・第2版』)というように否定的意味合いで用いられることが多い言葉であった。けれども、その「愛」を「恋」と合わせ「恋愛」とされることで、「自由」や「権利」などの新造語同様、そこに一種の化学反応が起こり、たちまちこの語は、西洋由来の新概念の訳語として定着していくのである。

新語としての「恋愛」は、原語の“love”や“amour”から離れ独自の理念を有するようになる。小倉敏彦は明治期の「恋愛」には、①《伝統的な性愛習俗とは異なり、精神的交流を本意とする》、②《両性間の人格の尊重、男女の人間的平等によって成立する》、③《婚姻の前提となる》の3つの論点があったとしている[小倉 1999:23]。これらの3点から、性欲

を基本とする「色」や「恋」と異なり、「恋愛」では精神性や平等性が重視されていることがわかる。

こうして、「恋愛」はたちまち時代を席捲する。山田の同時代人、透谷・北村門太郎(1868-94)が、1892(明25)年『女学雑誌』に掲載された「厭世詩家と女性」に書いた《恋愛は人世の秘鑰(ひやく)〔秘密を解く鍵〕なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽ぬき去りたらむには人生何の色味があらむ》という宣言は[北村 1894:7]、《日本における「恋愛」概念の土台にな》っていく[前川 2011:93]。それはこの宣言が《いまだ「恋愛」なるものが市民権を得ていない時代》において《「恋愛」こそ人生の至上価値と、真正面から「恋愛」を肯定した空前絶後の「恋愛」賛美の思想表明だった》からに他ならない[菅野 2001:56]。

やはり同時代人の木下尚江(1869-1937)は後の談話で、《この一句はまさに大砲をぶち込まれた様なものであつた。この様に真剣に恋愛に打込んだ言葉は我国最初のものと思ふ。それまでは恋愛一男女の間のことはなにか汚いものの様に想はれてゐた。それをこれほど明快に喝破し去つたものはなかつた》、《その冒頭の句はまさに一生の大事業であつたと思ふ。実に不朽の言葉である》とこの「恋愛」宣言の意義を強調している(『明治文学研究・1号』1934 初出)[木下 2001:275-6]。菅野は、北村のこの宣言には《江戸期までの色恋とは異なる、精神的な恋愛の主張》があるとする[菅野 2001:58]。北村の言葉は、肉感的な「色」や「恋」の世界から、精神的な「恋愛」へと人々の関心を誘う起爆剤となった。『少年姿』の発表から数年後で、「色」や「恋」、「恋愛」をめぐる社会環境は劇的に変化したのである。

北村が「恋愛」至上主義を宣言しなければならなかったこと、そして木下がそれに衝撃を受けたことは、この時期「恋愛」が市民権を得ていなかったことを示してもいる。けれども、「恋愛」が表舞台に登場したことにより男色を含む「色」の世界は急速に裏舞台から退場せざるを得なくなった。やがて《大正期を迎えると、「変態」という概念の台頭とともに、本格的な男色の周縁化の時代を迎える》のである[佐伯 2015:171]。

以上のように、近代的概念である「恋愛」に追いやられてゆく伝統的な「男色」を主題とする『少年姿』を「恋愛詩」と呼ぶことはできないのは確かだ。それに、「歌」の伝統に立脚し、長歌を尊ぶ作品を「詩」と呼ぶことは山田の本意ではないだろう。それゆえ、本稿では『少年姿』を、伝統的な「恋情」を歌った初の日本語による詩歌(=poetry)と位置付ける。

おわりに

前川は《「結婚」を後ろ盾とする異性間の「恋愛」が、同性間の「恋愛」にはない正当性を獲得していくプロセスは、言わばヘテロセクシズム〈異性愛主義〉の制度化とも言うべき現象》であると述べる[前川 2011:111]。前川の言うように、「恋愛」の台頭は異性愛を「正常」に位置付けることにより、同性愛としての男色を「異常」の範疇へと追いやっていった。

氏家は明治以前、《衆道を題材にした文学作品》が多くあったが、《今日その多くが一般の人々から忘れられて》いると指摘する[氏家 1995:39]。実際、近代に始まる“literature”制度においては、移入概念である「恋愛」すなわち異性愛が主題の玉座を占め、同性愛は異端とされていくことになる。では、男色を主題とした『少年姿』はポスト“literature”の時代におけるジェンダーフリーの先駆け足り得るのであるのか。

答えは否である。その理由を下記の佐伯の論議に見る。

佐伯は、こう述べる。男色には《上流社会の男性》は《“卑しい女性”など相手にしない》といった《男性優位のジェンダー意識》が存在する[佐伯 2015:72]。この《男色肯定の思想》は、《男性ジェンダーの優位という心性》から生み出され、《五戒》を根拠とする《中世以来の仏教的な女性観》と融合することで補強されてきた。この思想は《女性との交わり》のみならず《女性という存在自体の否定》に立脚しており[同:72-3]、稚児には《ステレオタイプな〈女性性〉》が付与される。結果、《セックスは男性》かつ《ジェンダーは女性》である稚児は《深刻な権力とジェンダーの上下関係》の渦中に置かれることになる[同:14-6]。こうして《稚児の身体》は、《未成年》であるがゆえの《社会的、肉体的脆弱性》によって《略奪の危機》にさらされ、その《容姿》の端麗さによって《売買される性の商品化の対象》となるのである、と[同:16]。

この佐伯の指摘は正鵠を射ている。男性優位の思想に裏付けられ、稚児の存在を前提とした男色は、決してジェンダーフリーを志向するものではない。それゆえ、『少年姿』に描かれた稚児たちの醸し出す美は、“literature”以前の伝統文化たる男色という落陽の最後の輝きに他ならないのである。

参考文献

【紙媒体】

氏家幹人(1995)『武士道とエロス』講談社

———(1998)『江戸の性風俗一笑いと情死のエロス』講談社

観世左近編(2007)『花月』檜書店

———(1997)『隅田川』檜書店

佐伯順子(1992)『美少年尽し』平凡社

———(2015)『男の絆の比較文化史』岩波書店

菅野聡美(2001)『消費される恋愛論・大正知識人と性一』青弓社

木下尚江(2001)「福沢諭吉と北村透谷」『木下尚江全集・第20巻』教文館

前川直哉(2011)『男の絆—明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房

前田愛(1989)『『賤のおだまき』考』『キタ・セクスアリス』の少年愛』『前田愛著作集・第二巻—近代読者の成立』筑摩書房

森鷗外(1972)「キタ・セクスアリス」『鷗外全集・第5巻』岩波書店

大本 達也, 美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」

柳父章^{やなぶ} (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波書店

『山田美妙集』 刊行委員会編 (2012) 『山田美妙集・第1巻—小説(1)・初期文集』 臨川書店

—— (2016) 『山田美妙集・第8巻—韻文/戯曲』 臨川書店

—— (2014) 『山田美妙集・第9巻—日本語表現/評論・随筆(1)』 臨川書店

【電子媒体】 (最終閲覧日: 2018年1月9日)

内田魯庵 (1902) 『社会百面相』 博文館

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886646>)

小倉敏彦 (1999) 「〈恋愛の発見〉の諸相—北村透谷と日本近代」 『ソシオロゴス・第23号』

ソシオロゴス編集委員会

(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slogos/archive/23/ogura1999.pdf>)

北村透谷 (1894) 『透谷集』 文学界雑誌社

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871945>)

坪内逍遙 (1886) 『当世書生気質・一読三歎・第8号』 晚青堂

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/887433>)

鶴屋南北 (1926) 坪内逍遙他編 「桜姫東文章」 『大南北全集・第8巻』 春陽堂

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1017144>)

前川直哉 (2007) 「明治期における学生男色イメージの変容—女学生の登場に注目して」 『教育社会学研究・第81号』 日本教育社会学会

教育社会学研究・第81号』 日本教育社会学会

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/81/0/81_5/_pdf)

山田美妙編 (1886a) 『新体詞選』 香雲書屋

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876381>)

山田美妙 (1886b) 『新体詞華・少年姿』 香雲書屋

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876333>)

作者不明 (1885) 『賤のおだまき』 市村丁四郎

(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/881185>)

日本文学・思想専攻 鈴鹿大学非常勤講師 touch62930@yahoo.co.jp

“Nanshoku” or Bimyo, YAMADA Taketaro's *Shonen Sugata* — A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State” (15) —

Tatsuya OMOTO

Abstract

In this paper we will examine Bimyo YAMADA Taketaro's *Shonen(Wakasyu) Sugata* (1886). This poetical collection deals with “Nanshoku (male homosexuality)” spread from the period of the warring states to the mid-Edo period. In the first chapter we will examine the seven long poems. In the second chapter we will assess the history of “Nanshoku”. In the third chapter we will verify the meaning of the book from the viewpoint of “love poem”.